

谷本多美子
邪教の棲む国

叢文社

谷本多美子
邪教の棲む国

著者／谷本多美子（たにもとたみこ）
1943年福島県相馬郡に生まれる。
洗足学園短期大学幼児教育科卒業。
会社員、幼稚園教諭を経て執筆活動に入る。
主な著書に『相続人』（叢文社）等。

邪教の棲む国
じやくのすむくに

発行 二〇〇〇年一月一〇日第一刷

著者 谷本多美子

発行人 伊藤太文

発行元 株式会社叢文社

東京都文京区春日二一〇一五

〒一〇二一〇〇三

電話 〇三（三八一五）四〇〇一

印刷・製本／第二製版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁についてはお取り替え致します。

Tamiko Tanimoto ©
1999 Printed in Japan.
ISBN4-7947-324-4

邪教の棲む国

◆ 目次

息子の留学 5

愛憎の果て 67

壺 130

装画 ■ 藤田 淳子

息子の留学

庭先の畑の縁に蓬が芽を出した。あと一週間もしたら摘み取れるだけの背丈になるだろう。今度の休日に夫の利夫と一緒に草餅をついて、都会で一人暮らしをしている息子の友彦に送ってやることにしよう。友彦は小さいころから餅の好きな子だった。たまの休暇で帰省すると、夏でも雑煮が食べたというほどだ。草餅にして送れば野菜不足も少しは解消できる。桂子は出勤して行く利夫を見送ると、庭続きにある畑に立って真っ先に友彦のことを思った。

長い冬から解放されて、土の中で眠っていた生命が動き出すこの季節が、桂子は一年中で一番好きだ。この村で生まれて、大人になって、利夫の妻になって、友彦が生まれて、取り立てて不幸だと思いう出来事もなく、平凡だと言い切る人生を送ってきた、とも思っている。敢えて何か不幸を探すとしたら、母子家庭に育ったことかもしれない。戦争から帰った父は、桂子が生まれるとすぐに病気で亡くなった。戦争ですっかり体を悪くしてずっと病気がちだった、と母が語っていた。桂子が物心ついたからというもの、桂子に後姿ばかり見せて働いてきた母も、祖父母を見送り、友彦が大学を卒業するまで生きていたい、と言いながら数年前癌で逝ってしまった。親しい人々との別れにも、ときがたつて、人がいつかは通らなければならぬ道だと、諦めがついた。

友彦も順調に成長して、利夫にも桂子にも言われたわけではないのに、自分で進路を決めて上京して行った。村人たちから友彦を褒められると、口では、

「好き勝手にやっているんですよ」

と言いながら、内心では満足に思っている。友彦もほんとうならこの春卒業して帰ってくるはずだったが、その予定は少し狂った。昨年の秋友彦から、

「一年留年したいんだ。このまま卒業して実力もないのに社会に出るのは不安だし、あと一年やりた
いことがあるから、わざと一科目落とすよ」

と、卒業して、就職も決まって、自分たちの前に颯爽と現れる姿を想像して、春がくるのを待ち焦
がれていた桂子をつかりさせる電話がきたのだった。

「自信たっぷりです卒業する人なんか少ないんじゃない。できるんだったら卒業だけはして、社会に出
てから勉強してもおそくないんじゃない」

せっかく浪人もしないで大学に入ったのにわざと留年するなんて、と桂子は不満だった。

「社会に出たら勉強してる暇なんかないと思うよ。今じゃないと駄目なんだよ。それと、今言うのは
どうかと思うんだけど、卒業したらアメリカに一、二年留学したいと思ってるんだ」

理系は苦手だからと経済を専攻した友彦だが、留学してまで何を学ぶのだろうか。桂子は臍に落ち
なかったが、問いただすのは友彦を大人として認めていないことになるような気がして、それ以上の
言葉は返さなかった。友彦はもう自分の手の届かないところにいるのだ。諦めと一緒に溜息も出た。
細谷の息子が今年大学を卒業できなかったんだって、と囁く村人たちの声が聞こえるようだった。

町役場に勤める利夫と細々と兼業農家を続けてきて、友彦への仕送しも楽ではないが、田畑からの
収穫物で食費はかなり切り詰められる。一年間伸びても、留学しても、自分たちの生活は今の延長線
上にあると思えばいい。甘い親だと言う者には言わせておけばいい。不満をくすぶらせているうちに、
桂子は覚悟を決めた。

「これからの若い者にはできるときに好きなことをさせろ。俺たちの若いときには世の中がまだ貧し

かったし、俺も兄弟が多くて夢を捨てて生きてきたんだから」

利夫も物分かりのいいことを言った。出世もしないが、口数も少なく職場でも家庭でも波風もたてない、仕事も誠実にこなす利夫だが、夢を捨てて生きてきて悔いが残っているのだろうか。それほどの財産もない農家の一人娘の自分のところに婿養子にきて、農業をしながら勤めに出ている利夫に、桂子はすまない気がした。

「だから俺は今の暮らしが不満だって言っているんじゃないよ。桂子と一緒にあって、人並の暮らしができる今が一番いいと思っている。友彦も親の期待どおりの大人になってくれたし。俺も定年までまだ十年ある。あいつが一人前になるまでは大丈夫だ」

利夫は桂子の気持を知ったかのように言った。

桂子は高校を卒業して隣町の役場に勤めて三年目のとき、ほかの課に勤めていた利夫から、人を介して結婚を申し込まれた。母や祖父母は、利夫が農家の三男だし勤め人だから、願ってもない縁談だと喜んだ。桂子も別段嫌いな相手ではなかったし、母や祖父母が喜ぶのだったら、と利夫からの申し込みを受けた。男子の多い高校で、淡い思いを抱いた相手に気付かれない術も、諦める勇氣も身に付いていた。いつか燃えるような恋をして、という願望は家族の絆が押し止めた。桂子が自由に生きる

と家族が悲しむことになるのだった。

利夫に不満があるわけではないが、桂子とはときおり同級生の西本亜季子や竹田洋^{ひょうし}を思い出す。高校での三年間、いつも行動を共にしていた亜季子とは、彼女が進学のために上京して行っただけは、お

互いに年賀状で安否を氣遣うだけの付き合いになってしまった。いつか亜季子に会いたい。でも……、と桂子の中に躊躇するものもある。都会の生活が長い亜季子の前に、古里を離れたこともなく、このまま老いようとしている自分の姿を曝すことへの恐れもある。

亜季子と二人でいるときに、男子からの視線は亜季子に注がれた。桂子はどこかかげりのある亜季子が妬ましかった。亜季子は誰かに興味を示すふうでもなかったが、同じクラスの竹田洋にだけは別だと、桂子は氣付いていた。桂子も、口数が少なくていつも何か考えている洋の視線に捉えられると、胸が苦しくなった。亜季子も洋も都会に出て行った。洋の消息はいつしかわからなくなった。亜季子から短大を卒業してすぐに結婚した、と知らせがきたとき、相手が洋でなかったことに安堵した。

二年前、亜季子から喪中のはがきが届いた。短く夫の死を記してあった。桂子は手紙を書くことをためらった。どんな言葉も亜季子を慰めることにはならないと思つたからだ。何日かして、季節外れの白いカサブランカを送った。亜季子を思い出すとき、山中によい香りを放つて人知れず咲く山百合を思い浮かべることがあった。亜季子からも、一人になって夫の写真の前に飾るのは、何故だか白い百合です、と短い札状が届いた。一年たつてまた年賀状のやりとりが復活した。今年の亜季子からのには、アルバイトを始めました、と一行書き添えられてあった。亜季子は立ち直った。都会で颯爽と生き始めた亜季子を想像して、桂子は複雑な氣持になった。辛いとか淋しいとでも書いてあったらどうだったというのか。亜季子が泣き言でも言ったら優越感に浸ったとでも言うのだろうか。桂子は自分の中にくすぶっているものが、うっとうしかった。いつか亜季子に会うことがあったら、そのとき、友彦には自慢の息子でいてほしい。そうしたら、初めて亜季子と対等になれるような氣がする。

留年を決めた友彦から、友達に誘われて英会話のサークルに入った、と知らせがきて、そのときを境に電話の間隔が空いてきた。利夫と一緒に友彦に送った草餅は、何回届けに行ってもお留守です、というメモとともに送り返されてきた。一度目は、留学の準備で夜遅くまでどこかで学んでいるのだ、と桂子は疑いもなく思った。蓬がまだ柔らかいうちに、と二度目に送った草餅も同じように戻ってきた。二度も偶然が重なるだろうか、と桂子は初めて疑いをもった。疑いは不安に変わった。

「お父さん、友彦に送った荷物がまた戻ってきたわ」

夕方、勤めから帰った利夫に運送会社のメモを見せて桂子は言った。

「留学の準備で大変なんだろう。それともたまにはどっかで羽根伸ばしてんのかな」

利夫は最初取り合うふうもなかった。

「不在通知表を見ているでしょう。連絡する時間もないのかしら。ほんとに遊んでいるんならいいけど、何か事故とか事件に巻き込まれたんじゃないかしら。都会では恐ろしいことがいつも起きているから」

「電話してみたか」

利夫の表情が真剣になった。

「何度もしたわ、朝も昼も。ちっとも出ないのよ」

「俺がしてみる」

桂子が言い終らないうちに、利夫は居間の受話器をとった。耳に受話器を押し当てている利夫の側

で、桂子も耳を澄ませた。呼出音が十回以上鳴っても友彦が出る気配はない。利夫がもう一度番号を押し直した。二度目も同じだった。

「駄目だ、出ない」

諦めて利夫は受話器を置いた。

「やっぱり、何かあったんだわ」

桂子の不安は増した。

「何かおおごとになっていたら警察から連絡があるだろう」

考え込んでいる桂子に利夫が言う。

「事件や事故で死ななければ警察は連絡なんかよこさないわよ」

「よし、警察に電話して聞いてみよう」

利夫は先ず地元の警察に電話をして、友彦の住む地域の管轄の警察の番号を調べた。

「何も起きていないそうだよ」

警察と話し終った利夫が言った。

「ほかの場所で事故に遭うことだってあるでしょう」

「心配性だな桂子は。そんなに言うんなら友彦のところに行ってくるといいよ。あいつだって暫く帰れないだろうから」

納得しない桂子に利夫が言う。桂子は言われなくてもそうしようと思っていた。利夫にも一緒に行つてほしいと思ったが、まだ何か起きたと決まったわけではないので、自分だけ先に様子を見に行く

ことにした。翌朝とりあえず二、三日分の着替えを持って桂子は一人で友彦のところへ向かった。

自宅を出て二時間が過ぎた。ひどく長く感じられた二時間だった。上野まではまだ半分残っている。鞆の中に入れてある読みかけの本を開く気にもなれず、桂子は車窓に目を移した。遠くの山々に山桜が淡く咲いている。家の裏山にも山桜の太木があつて、咲くのはもう少し遅い。このあたりは気温もすこし高いにちがいない。南に移動するにつれ山々は遠くになり、建物が増え、景色も灰色になつていく。四年前の今頃、入学する友彦を東京郊外のアパートまで送ったときは、友彦が誇らしく、車窓からの景色ももっと輝いて見えた。今、友彦は何をしているのだろうか。窓の外を見て考え込んでいた桂子には、通路を通り過ぎて行く車内販売のワゴン車も、販売員の声も意識の外だった。

上野から私鉄に乗り継いで一時間半ほどの郊外に、友彦の住むアパートがある。駅からアパートまで一キロほどの通りに葉だけになった桜の並木がある。四年前も同じ時期に通った。桜の季節は見事なのだろう。家を出るときは、桜はまだ満開のまま、花弁をわずかず落していた。季節が少しずつれているのだ。考えながら歩いているうちに汗ばんできた。昼近くに上野に着いて真つすぐに来たのでまだ食事もとっていないかった。急に空腹も覚えた。桂子は立ち止まると上着を脱いで片手に抱え、目前に近付いた友彦のアパートへと急いだ。

新築なのに安く借りられたと利夫や友彦と喜んだ四年前と、アパートのたたずまいはあまり変わっていないかった。周囲の雑草だけは伸びていて、手入れる住人が誰もいないことを思わされた。何日か滞在することになったら、草取りをしてもいいと桂子は思った。この思いは実行することはない、

滞在だけは必然的に伸びていったのだった。

二階の友彦の部屋を見上げると、雨戸が閉まっていた。出かけるのにわざわざ雨戸を閉めたのだろうか。そのような用心深さがあったかもしれない。まだ小学校にも行っていないころ、ガスに煮物の鍋をかけて畑に野菜を摘みに行つて戻つてみると、火が止めてあった。

「あぶないから、ぼくとめたよ」

自分の背丈とあまり違わないガス台の側で、真顔で言っていた友彦の姿が浮かぶ。とにかく、上がつてみよう。二階への階段は足を乗せるたびに揺れて金属的な音がする。友彦のような若者が上がり下りしたら、もっと揺れて大きな音がするに違いない。

合鍵を差し込んで回した。手応えがあつて簡単に開いた。当り前のことが嬉しかった。把手を引くと、入口から光が差し込んだ。一間だけの部屋に布団が敷いたままにしてあった。目を凝らすと掛布団に膨らみがある。

「友彦、いるの？」

返事の代わりに掛布団が動いた。

「友彦、寝てるの、具合でも悪いの」

友彦が上半身を起こした。髪も髭も伸びきつて別人のようになった友彦を見て、桂子は息を呑んだ。去年の夏に友彦が帰省して、そのときには少しも変わってはいなかった。一年も経たないのにこの変りようはどうしたというのか。ここへ来る途中の電車の中でも一人か二人くらい友彦のような若者を見かけないわけではなかったが、他人だから関心がなかった。彼らと違って桂子の目に友彦が異常に映